

製品名: グレリンウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab11438**

研究使用のみ

概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	WB,IHC,ICC/IF,ELISA
反応性	ヒト、マウス、ラット
標識	非共役
修飾	未修正
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

応用

希釈倍率	WB 1:500-1:2000,IHC 1:100-1:300,ICC/IF 1:100-1:300,ELISA 1:10000-1:20000
分子量	13kDa

抗原情報

遺伝子名	GHRL
別名	GHRL; MTLRP; Appetite-regulating hormone; Growth hormone secretagogue; Growth hormone-releasing peptide; Motilin-related peptide; Protein M46
遺伝子 ID	51738.0
SwissProt ID	Q9UBU3
免疫原	抗血清はヒトグレリン由来の合成ペプチドに対して作製された。AA 範囲: 47-96

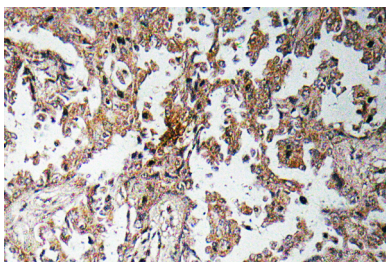
背景

この遺伝子は、グレリン-オベスタチンプレプロタンパク質をコードしており、このタンパク質は切断されてグレリンとオベスタチン

という2つのペプチドを生成します。グレリンは強力な食欲刺激物質であり、エネルギー恒常性維持に重要な役割を果たします。空腹時に分泌が開始され、視床下部の成長ホルモン分泌促進因子受容体に結合し、成長ホルモン（ソマトロピン）の分泌を引き起こします。グレリンは、空腹感、中脳辺縁系経路を介した報酬知覚、胃酸分泌、消化管運動、膵臓からのグルコース刺激によるインスリン分泌など、複数の活動を制御すると考えられています。当初、オベスタチンは満腹感を促進し、摂食量を減らすことでグレリンと相反する役割を果たすと考えられていましたが、この作用については依然として議論が続いています。最近の報告では、オベスタチンが脂肪細胞機能の調節を含む複数の代謝的役割を担っていることが示唆されています。機能：グレリンは成長ホルモン分泌促進受容体1型（GHSR）のリガンドです。下垂体からの成長ホルモンの放出を誘導します。食欲増進作用、脂肪蓄積の誘発、胃酸分泌の促進作用を有し、成長調節に関与しています。機能：オベスタチンはGPR39のリガンドである可能性があります。食欲抑制作用を有し、摂食量を減少させる可能性があります。胃内容排出活性および小腸運動を低下させる可能性がある。、質量分析:グレリン-27-C10、O-デカノイル化体 PubMed:12414809,質量分析:グレリン-27-C8、O-オクタノイル化体 PubMed:12414809,質量分析:グレリン-28-C10、O-デカノイル化体 PubMed:12414809,質量分析:グレリン-28-C10:1、O-デセノイル化体 PubMed:12414809,質量分析:グレリン-28-C8、O-オクタノイル化体 PubMed:12414809,オンライン情報:グレリンエントリ,オンライン情報:Gut feelings - 2013年1月号 66 2006年,PTM: オベスタチンの活性にはLeu-98のアミド化が必須である。、PTM: グレリンの活性にはO-オクタノイル化またはO-デカノイル化が必須である。O-デカノイル化されたグレリン-27-C10とグレリン-28-C10は、Ser-26に結合したカルボン酸の炭素骨格の長さが異なる。グレリンのごく一部であるグレリン-28-C10:1は、一価不飽和カルボン酸で修飾されている可能性がある。、類似性: モチリンファミリーに属する。、組織特異性: 胃で最も高い濃度を示す。すべての形態は血清中にも存在する。胃切除術後、胃におけるグレリン合成の喪失は他の組織によって補われる。、

研究分野

画像データ

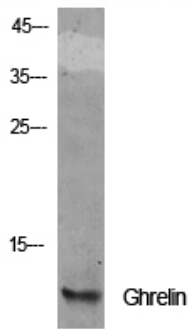


パラフィン包埋ヒト肺癌組織におけるグレリン抗体の免疫組織化学分析。

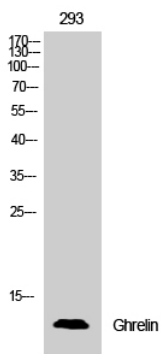


グレリン抗体を使用した293細胞溶解液のウエスタンブロット分析。

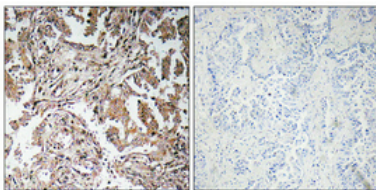
55— 293 Paclitaxel



グレリンポリクローナル抗体を用いた様々な細胞のウェスタンブロット分析



グレリンポリクローナル抗体を用いた 293 細胞のウェスタンブロット分析



パラフィン包埋ヒト肺癌の免疫組織化学染色。抗体は 1:100 (4°C、一晩) に希釈した。抗原賦活化には、高圧高温トリス EDTA (pH8.0) を使用した。抗体から得られたネガティブコントロール (右) は、免疫原ペプチドで前処理した。